1　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現在の日本の社会は、無言化の方向をたどっているのではないだろうか。そして、その主な原因は、社会生活の機械化と都会化にあるのではないだろうか。

昔は人がしていたことを、現在は機械がしていることが多い。駅に行って電車に乗ろうとする。切符を買うのは自動販売機からである。目的地までの運賃を確かめて、お金を入れボタンを押すと、切符が出てくる。ものを言う必要はない。遊びも機械化してきた。テレビゲームやパソコンでゲームをして遊ぶ。相手が機械だから、ものを言う必要はない。「しまった。」とか「やったぞ。」と言うことはあっても、ひとりごとにすぎない。

最近は、機械の無言性を補おうとして、自動販売機やカメラに、コンピュータで合成された音声で、「ありがとうございます。」とか「フィルムが入っていません。」などと言わせるようになった。しかし、人は、これらの声に返事はしない。これらの声を無視することに慣れると、機械だけでなく、人間が言う言葉に対しても答えない態度をもつようになるかもしれない。

また、都会の生活では、買い物をしにスーパーマーケットに行っても、必要な品物を選んでレジスター係に差し出すと、代金を計算してくれる。お金を払って品物を持って外に出る。多くの場合、ひとことものを言わずに済むしくみになっている。そのうえ、都会では、出会う人のほとんどが見知らぬ人である。だから、他人には無関心になり、ものを言う機会がなくなってしまう。それどころか、都会に住んでいると、他人は自分にとってじゃまな存在になる。ラッシュ時に電車に乗ろうとすると、他人のために自分が乗れなくなる。やっと乗った電車の中では、あっちこっちへと押されてへとへとになる。電車を降りると、大勢の他人は歩くのにじゃまである。こういう中では、見知らぬ他人と親しくものを言うことがなくなっていく。

無言化といっても、もちろん、日本人が、いつも黙っている人間になってしまうわけではない。事実、電車の中でも、友達と乗っていれば、いろいろと話をする。教室の中では、話がはずんで、わいわいがやがやとそうぞうしくなる。昼間会った友達と、夜になってまた長電話することさえあるだろう。

こうした言葉のやりとりには、言葉の送り手と受け手とが互いに相手についてもっている知識や、その場の状況についての判断などが理解を助ける。例えば、出会った友達どうしが、次のような言葉を交わすことがある。

「昨日、どうだった。」

「駄目だった。」

「次の日曜に行くよ。」
「いっしょに行こうか。」
「それはいいな。」
　言葉だけでは、なんのことかわからない。魚釣りが好きな二人が出会った。A君は、昨日の日曜日に魚釣りに行った。それを知っているB君がA君に、「昨日、どうだった。」と尋ね、「駄目だった。」という返事を聞いて、次の日曜日には自分が魚釣りに行くことを告げているのである。だが、このような簡単な表現で通じるのは、ごく限られた範囲の人に対してだけである。
　わたしたちの社会は、言葉によるコミュニケーションによって支えられている。ここでいうコミュニケーションとは、狭い範囲の限られた人との会話をこえて、もっと広い範囲の人々との気持ちや考えの通じ合いを意味している。この大切な、言葉によるコミュニケーションを成り立たせる条件を考えてみると、次の三つを挙げることができる。
　第一は、人と人との関係を温かい心で保ち、積極的に人に話しかけようとする態度をもつことである。学級会活動や生徒会活動、部活動やクラブ活動などを通して、できるだけ多くの友達や先生と意見を交換し相互理解を図ることもその一つである。また、地域社会での福祉活動に参加することも、その機会を与えてくれる。
　第二は、人から話しかけられたら、それを正しく理解し、必要によって、的確に答えるという態度をもつことである。人から話しかけられてもそれを拒否するようでは、コミュニケーションは成り立たない。意見や考えの異なる人の話にも耳を傾ける心が大切である。
　第三は、自分の考えが他人にわかってもらえるように表現する能力を身につけることである。広い範囲の人々とコミュニケーションを行おうとするときは、親しい者どうしのおしゃべりのやり方では通用しない。自分の表現能力が十分でなく、またそのことに気づかないでいると、他人は自分を理解してくれないと誤解したり、世間は冷たいと思いこんだりすることにもなる。言葉を適切に選び、筋道の通った話を組み立てることによって、考えや気持ちを伝えるようにする努力が必要になる。
　現在の日本の社会に見られる、機械化と都会化による無言化の方向は、わたしたちからコミュニケーションの機会と経験をうばおうとしている。その認識のうえに立って、ここに挙げた三つの条件を身につけるように積極的に取り組んでいくことが、この無言化社会の中で、心と心の通い合う豊かなコミュニケーションを回復させる道ではなかろうか。
（樺島（かばしま）忠夫「無言化社会の中で」による）

一　――線部「無言化」とありますが、筆者が原因として挙げているものは何ですか。本文中から探し、**十五字以内**で**抜き出し**なさい。

二　――線部「もの」とありますが、どのような意味で用いられていますか。同じ意味で用いられているものとして最も適切なものを次の**1**から**4**までの中から**一つ**選びなさい。

1　目にもの見せる。
2　金にものを言わせる。
3　ものの見事に成功する。
4　あきれてものが言えない。

三　――線部「言葉によるコミュニケーションを成り立たせる条件」とありますが、第二の条件として筆者はどのようなことを挙げていますか。解答欄（らん）に合うように**三十字以内**で書きなさい。

四　――線部「親しい者どうしのおしゃべりのやり方」とありますが、これはどのような話し方ですか。最も適切なものを次の**1**から**4**までの中から**一つ**選びなさい。

1　単語や短い言葉などの簡単な表現による話し方。
2　身振り、手振りを用いて、表情豊かに話す話し方。
3　思っていることを包み隠さずに本音でぶつけ合う話し方。
4　互いが持っている異なる知識が話の理解を助ける話し方。

五　筆者はなぜ、日本の社会が「無言化」へ向けて進むことを心配しているのですか。その理由を**「から。」**に続くように、**四十字以内**で書きなさい。

六　あなたの身近な地域社会のコミュニケーションが現在よりも豊かになるためには、筆者が挙げた第一から第三の条件のうち、どれが最も必要だと考えますか。次の条件**1**から条件**3**にしたがって書きなさい。

条件1　全体を二段落構成とし、第一段落には、筆者が挙げる第一から第三の条件のうちいずれか**一つ**を用いて、自分の立場を明らかにすること。
条件2　第二段落には、あなたがそう考える理由を書くこと。
条件3　**八十字以上、百字以内**で書くこと。